

大橋めぐみ作 「わたしのEメール」

<前編>

- (効果音) (パソコンのキーボードの音)
真美モノローグ 「よろしければ、お返事をお待ちしています」...と...できた！ さて、送信するぞ。ああ、緊張するなあ。
- ナレーション わたし、森山真美。青春大学の2年生。今1通のEメールを書き終えたところ。最近はどここの大学でも、学生に、メールアドレスが配られるようになったけれど、うちの大学でも学生番号を基準にして、メールアドレスが全員に配られている。わたしは、ちょうどパソコンを買い換えた1つ下の妹の真子を拝み倒し、中古パソコンのゲットに成功したのだ。普段は学生の特権をフルに活用して、図書館の一角にあるインターネット・コーナーを利用することにしている。何てたってタダだもんね。友達とのメール交換もすっかり習慣になってきたのだけど、今わたしが書いたメールはちょっと違う。わたしは...実はひそかにあこがれている武田先輩に「デートのお誘い」メールを書いていたのだ。アドレスになる先輩の学生番号も、ばっちりチェック済み！ 昔なら「帰り道で告白」だけど、今は何と言ってもEメールだよな。
- 秀一 (背後から唐突に)学校でラブレター書くなよな。
真美 わーっ！
秀一 シー。図書館で大声出すなよ。
真美 ひどい、秀ちゃん、見ないでよ。
秀一 こんなとこで書いてるほうが悪い。それに、学校で「秀ちゃん」はやめろって。カッコわりいよ。
- ナレーション この失礼なやつは三崎秀一といって、私の幼なじみ。家が向かい合わせで、小さいころから家族ぐるみで行き来をしてたので、兄弟みたいにして育った。小学校の集団登校はもちろん同じ班だし、日曜日にも、クリスチャンで、教会学校の先生もしていた父に連れられて、秀ちゃんと真子の3人で通ったりしていた。私が私立の女子高に進学したので、彼とはやっとな離れたと思ったのだけど、何と偶然にも、同じ大学を受験していた。こういうのを“腐れ縁”と言うのかな。
- 秀一 武田先輩ってさあ。去年の学園祭ライブでギター弾いてた人だっけ？
真美 そ、そうだよ。よく覚えてるね。
秀一 お前、キヤーキヤー騒いでたじゃん。でもさあ、あの人、彼女とかいるんじゃないの？ すっげえモテるんだろ。
真美 大丈夫！ “恭ちゃん情報”によれば、今はフリーのはずだもん。恭ちゃんの情報網に引っかからないんだから間違いはないよ。ねえ、それよりさ、だれにも

言わないでよ。ね？

ナレーション

恭ちゃんっていうのは、高校時代からの親友の大原恭子のことで、うわさ話や情報をだれよりも早く仕入れてくるという、変な特技を持っている。わたしが先輩にあこがれているのを知っているのは彼女だけだ。情報を教えてもらう手前、仕方なくバラしてしまったけど、今のところ、ちゃんと秘密を守ってくれているみたいだ。わたしはメールをもう一度読み直すと、深呼吸をしてから送信アイコンをクリックし、立ち上がった。あと一つ授業が残っている。

(効果音)

(教室のガヤの中で、声を抑えてしゃべる2人。)

恭子

真美、この前借りたCD持ってきたよ。これ、すごいいいじゃん！

真美

…。

恭子

ちょっと、真美。聞いている？

真美

(大きいため息)

恭子

ねえ、真美ってば。

真美

(上の空)…うん、聞いているって。

恭子

何、意味深なため息ついてんのよ。

真美

恭子ちゃーん。

恭子

な、何よ、急に。

真美

わたしね、武田先輩にさあ…。

恭子

武田先輩に…何？

真美

メール出しちゃった。「今度の日曜日、お暇ですか？」って。

恭子

(ちょっと驚いて)今度日曜日？ そ、そうなの。でもさ…。

真美

何？

恭子

あの～… あのね…。

真美

何よ？

恭子

うん…。最新の“恭ちゃん情報”によればね、今度の日曜日は多分竹田先輩ダメだと思うよ。

真美

えー、何でなの？

恭子

何でって言われても困るけど… 多分ダメだと思う。

真美

何か知ってんなら教えてよ。

恭子

わ、わたしもね、それ以上は知らないんだ。ごめんね。

真美

ふーん。

恭子

あ、ねえ、それよりさ、ちょっと用事を思い出しちゃったんだ。悪いけど、わたしの分の出席カードも出しといてくれない？ お願い。

真美

えー、どこ行くの？

恭子

(そそくさと)うん、ちょっと。カードお願いね。じゃあね。

真美

恭子…。

真美モノローグ ナレーション もう、急にどうしたのよ。変なの。
でも、恭子の言ったとおり、次の日曜日になっても先輩からの返事はなかった。

(効果音) (マウスのカチカチ音、数回)

真美モノローグ ナレーション やっぱダメかぁ…。 “恭ちゃん情報” 的中か。
そこへスッと入ってきたのは、妹の真子。「ノックくらいしろ」といつも言うのだが、聞いたためしがない。

真子 朝ごはんも食べないで何やってんの？

真美 別に。

真子 今日デートするとか言ってなかったっけ？

真美 ボツよ。ボツ。あ～あ。急に暇になっちゃった。お母さんたちは？

真子 もう教会行っちゃったよ。

真美 そっか…。 真子、付き合わない？

真子 ダメだよ。わたしも約束あるもん。

真美 あっそ。

ナレーション 妹にもフラれたわたしは、結局、向かいの家の暇人、つまり秀ちゃんを無理やり連れ出して遊びに行くことにした。

映画館内アナ 館内のお客様に申し上げます。上映中は携帯電話、ポケットベル、腕時計のアラームなどはお切りくださいますよう、お願いいたします。

真美 この映画、先輩と見るはずだったのになぁ。

秀一 悪かったなー。お前が付き合えて言ったんだぞ。

真美 だって、独りなんて惨めじゃん。あ、それよりさ、コーヒーか何か買ってく？

秀一 おう。失恋祝いにおごってやろうか。

真美 ラッキー！… あ！

秀一 ん？

真美 秀ちゃん、あれ。

秀一 どこだよ？

真美 出口のところ。

秀一 …武田先輩じゃん！ すげえ偶然。やっぱ先約あったんだよ。

真美 うん、だれか待ってるみたいだね。

秀一 そりゃやっぱ彼女だろうな。

真美 彼女なんていないって。 “恭ちゃん情報” に間違いはないんだから。見つからないうちに、中入ろうよ。

ナレーション いくら何でも、こんな所で見つかっちゃったら気まずすぎる…。 そう思って歩き出そうとした時、不意にあっちの会話が耳に飛び込んできた。

恭子 (遠くで) すみません、売店がすごく込んでしまって。お待たせしました。

武田 何を買ったの？
恭子 パンフレットと、あと写真集も！ もうハマリそう(笑い)。
武田 (笑い)そう。じゃ、行こうか。おなかすいてない？
恭子 すいてます！ どこか知ってますか？(F/O)
秀一 おい、あれ恭子だろう？
真美モノローグ ...何で恭ちゃんが先輩と一緒になのよ...。
秀一 なんか、話違うじゃん。情報の主がデートの相手かよ。
ナレーション 一瞬、頭の中が真っ白になって、何が起きているのか考えられなかった。
(効果音) (回想・エコー)
恭子 最新の“恭ちゃん情報”によればね、今度の日曜日は多分、武田先輩ダメだ
と思うよ。
真美 えー、何でなの？
恭子 何でって言われても困るけど...多分ダメだと思う。
真美 何か知ってるんなら教えてよ。
恭子 わ、わたしもね、それ以上は知らないんだ。ごめんね。
(効果音) (回想エコー終わり)
真美モノローグ あの時、恭ちゃんは正直に教えてくれることだってできたはずなのに...。許せ
ない！
ナレーション わたしは思わず、出口の恭子に向かって走り出そうとした。

<後編>

ナレーション わたしは森山真美、青春大学2年生。あこがれの竹田先輩をEメールで映画
に誘ったのに、先輩はまるで無視。それだけならまだしも、何と親友の恭子が
先輩とデートしてるのを目撃してしまったのだ。
秀一 待てよ！ どうすんだよ！
真美 追いかけるに決まってるじゃない。
秀一 追いかけてって、どうするつもりだよ。
真美 恭ちゃんったら、わざと黙ってたのよ。どういうつもりか、はっきりさせてもら
うわ。
秀一 今そんなことしたら、先輩の前でメチャクチャなことになんだろ。
真美 いいもん、どうせわたしなんて無視されてんだから。もう先輩なんて関係ない
もん！
秀一 だからって、今邪魔していいわけねえだろ。先輩やあの子の気持ちも考える
よ。
真美 恭ちゃんの気持ち？ 恭ちゃんはわたしをだましたんだよ。何でわたしがそん
なこと考えなきゃいけないの？ ぶち壊されたって、文句言わせないんだか

ら！

秀一 いい加減にしろよ。後で 2 人でじっくり話し合えば済むことだろ？ 迷惑かかんの分かってて追いかけようなんて…。

真美 何よ。秀ちゃんに、今のわたしの気持ち、分かりっこない！

秀一 …お前さ、今すっげえ“やなやつ”だぜ。

真美 そんな…。どうせ…どうせわたしなんか！

ナレーション 中ではもう映画が始まってるようだったが、わたしは係員の人の迷惑そうな視線も気にせず、しばらくそこで泣き続けた。もう先輩のこたなんてこれっぽっちも気にならなかった。あるのはただ、恭ちゃんへの怒りと、秀ちゃんに“やなやつ”と言われたショックだった。

でも考えてみると、その時のわたしは、本当に“やなやつ”だったのだ。一方的に先輩にあこがれて、それがかなわずに一方的に怒りまくって。わたしが恭子の立場だったら、舞い上がっているわたしに、とても本当のことなど言えないことぐらい、分かってるのに…。

気がつくとわたしは、あきれ顔の秀ちゃんを残して、映画館を飛び出していた。ただひたすら自分が惨めで、腹立たしかった。

(音楽) (動揺のモチーフ)

ナレーション その日の夕方。(森山家・夕食時)

真子 お姉ちゃん、どうしたの？ 何か無口じゃん。

真美 …別に。

真子 秀ちゃんになんか言われて、ムカついてんじゃないのぉ？

真美 …別に！

ナレーション そう言ったものの、あの時は訳も分からなかった自分の気持ちが、それなりに読めてきた。そしてあまりにもメチャクチャで、強引な昼間の自分の行動が、恥ずかしくなった。“やなやつ”。秀ちゃんの一言は、悔しいけど凶星だった。

真美モノローグ でも…だからって、わたしに何ができたの？ 恭ちゃんに裏切られてこの怒りを一体どうすればよかったの？

真美 …ごちそうさま。

父 真美。

真美 何？

父 その…。何かあったんだろ？ だれにも相談したくないなら、聖書でも読みなさい。いいね。

真美 何でもないよ。ごちそうさま！

ナレーション わたしは自分の部屋に入ると、パソコンの電源を入れた。このモヤモヤした気持ちを何とか紛らわせたかった。その時、1 通のメールが届いているのに気づいた。

(効果音) (マウスの音、数回)

真美モノローグ あれ？ これって…。

(効果音) (クリック)

真美モノローグ 秀ちゃん!? 何をわざわざ…。言いたいことがあるなら、言いにすればいいじゃん。お向かいなんだから。

秀一 真美、まず昼間はごめん。あの時、お前がどれだけつらかったかって、考えもしないでひどいことをやってしまった。家に帰ってから、ずっとそれが気になって仕方なかった。おれって、何てひどいやつなんだって頭を抱え込んでた。でも、どうにも落ち着かなくてさ。で、久しぶりに聖書なんて開けてみた。そしたら、だんだん落ち着いてきて、自分がどうしたらいいのか分かってきた。お前に謝って、許してもらわなきゃって思った。でもさ、おれが思っているよりも、お前ももっともつらいよな。多分、お前だって怒りたくて怒ってるんじゃないと思う。怒ってる自分が一番しんどいんじゃないかと思う。だから、お前も、もしまだ聖書を持ってたら、開けてみるよ。おれのお勧めの箇所はここ。“エペソ人への手紙 4:31～32”。昔、教会学校でお話聞いたの、覚えてるか？

じゃ、またな。今日はほんとにごめん。

真美モノローグ 秀ちゃん…。

ナレーション いつもは顔を合わせて言いたいことを言い合ってるのに、その初めての秀ちゃんからのEメールに、わたしは何だか胸がドキドキしていた。そこには、すごくまじめで優しい秀ちゃんがいた。

真美モノローグ “許してもらわなきゃ”って。わたし、本当に“やなやつ”だったから、そう言われても仕方ないのに…。ええと、聖書、どこだっけ？

(効果音) (本棚を探す音)

ナレーション わたしは、子供のころ教会学校に持っていった古い聖書を探し出すと、ほんとに久しぶりにページをめくった。そして、秀ちゃんのお勧め箇所を開いた。

真美モノローグ あ、線が引いてある。

「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」

そう言えば、昔、教会学校で教師をしていた父からこんなことを言われたような気がする。

(効果音) (エコー。)

若い父 お友達とけんかしてる時、うれしい人はいますか？ 先生もね、全然うれしくないし、すごく嫌な気持ちになります。けんかしたいわけじゃないのに、どうしてけんかしちゃうんでしょうか。わたしたちは、自分の思い通りにならないと、

怒ったり他の人のせいにしたりする、悪い心をみんな持っているんです。これを「罪」って言います。

真美モノローグ
ナレーション

罪か。わたしのことだ…。すごい“やなやつ”…。
わたしは、急いでその聖書を持って、リビングで新聞を読んでいる父のところへ行った。思えば中学に入ってから、とんと教会から遠ざかり、聖書も読まなくなったわたしだったが、仕事でどんなに疲れても教会を休まず、何かのときにはいいアドバイスをしてくれる父を、時には煙たく感じながらも、わたしはひそかに尊敬していた。そして今のわたしは、無性に父の言葉が聞きたかったのだ。父は、その聖書の箇所を目を通すと、小さいころ聞いた話の続きをしてくれた。

父

ねえ真美。わたしたちは自分の心にある「罪」のために、他人に怒りをぶついたり、傷つけたりするね。しかし、神様のなさったことは、まずわたしたちを許すことだったんだ。そのために、イエス・キリスト様をこの世に送り、わたしたちの罪を全部負わせて、十字架の罰をお与えになった。だからわたしたちにはイエス様によってすでに「許し」が用意されているんだよ。

真美モノローグ

わたしも？ こんな“やなやつ”でも許される？ 恭子のこと「許せない」って思ったんだよ。秀ちゃんが止めなかったら、大事な親友にとんでもないことをしたかもしれないんだよ！

父

罪を持たない人は一人もいない。だれでも、イエス様に求めるなら、許されるんだ。神様の下さる「許し」とは、そういうものなんだよ。真美はこんな自分が許されるとしたら、どう思うかな？

真美

「えー、本当にいいの？」って感じ。

父

うん。だからね、まず神様が真美を許しますって言われるのだから、今度は真美が同じようにしなさいと、このみ言葉は教えているんだ。自分が許していただいたのに、他人は許せないって思うかな？

真美

…ううん。そんなことない。わたし、友達を許せない自分が嫌だったんだけど、こんなわたしが許していただけるんなら…わたしもそうしたい。

ナレーション

それは、不思議なくらい穏やかな決断だった。人を怒り、憎み続けるのは何て苦しいんだろう。そして、許すってことは、何て優しい気持ちなんだろう。それは、許されたことを知って、初めて味わう心の安らぎだった。

(効果音)

(学校の図書館のざわめき。キーボードの音。)

真美モノローグ

「…2年、森山真美…」と。できた！

秀一

(後ろから近づき、突然) 今度はだれにラブレターだ？

真美

わー！ 見ちゃダメ！

秀一

シー！ 図書館で大声出すなって。

真美

ふう、びっくりした。

秀一 学校で書くやつが悪い。
真美 今度は違うもん。それよりさ、秀ちゃん。昨日Eメール、読んだ。
秀一 あ？ ああ、何か、柄でもねえこと書いちゃって…。
真美 (笑い)ちゃんと聖書読んだんだよ、あのあと。
秀一 おう。
真美 それで、今日ちゃんとは、やっぱりきちんと話すことにしたよ。そう決めたら、
すごく気持ちが楽になれたんだ。
秀一 そっか…。あ、もしかして、そのメールって、それか？
真美 ううん。これは違う。恭ちゃんとは、ちゃんと会って話すから。
秀一 そうだな。それとさ…。
真美 何？
秀一 次にだれかを誘うときは、今度こそよ～くチェックして、本当にフリーなやつにし
ろよ。おれはイエス様じゃないんだから、そう何度も“身代わり”はごめんだ
ぜ。
真美 えー、そんなこと言わないでよ～。
秀一 や～なこった。
真美 ケチ～～。
秀一 何とでも言え。じゃ、またな。
ナレーション 秀ちゃんの後ろ姿に手を振りながら、わたしは“秀ちゃん、ありがとう”と心の
中でつぶやいた。そしてこの気持ちを、秀ちゃんにEメールしようと心に決め
た。それには、まず恭子との仲直りだ。その日は、そんな遠い先のことではな
いような気がした。

(完)